

慈愛の人 良寛入門

小島 正芳

はじめに

皆さん、こんにちへ。ただいま紹介いただきました小島正芳です。配信という形で、オンラインで皆様方にお届けする形ですが、良寛さんのことを知ってもらうために、精一杯お話ししていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

良寛さんというと、名前も初めて聞いたよ、という方もいると思いますし、そういえば、小さいときに読んだ童話・絵本で良寛さんの逸話を知ったなあ、という方もいらっしゃるでしょう。人それぞれによって良寛さんのイメージというのはあると思いますけれども、明治時代、良寛さんについて、仏教者としてたいへん素晴らしい人だ、と高い評価をされましたのは、この駒澤大学の前身であります、曹洞宗大
学林専門学本校の三代目の総長をやられた、原坦山たんざんという方でした。

曹洞宗というのは、鎌倉時代の新しい仏教として、道元禪師が中国へ渡られて帰られてから曹洞宗を開かれたということは、皆様方も知っていらつしやると思うのですけれども、この原坦山さんは、「良寛さんは、曹洞宗を開かれた道元禪師以来の巨匠である」と、明治時代に述べられているわけです。原坦山さんは、東京帝国大学インド哲学科でも仏教学をお教えになりました。

良寛さんは、子供たちと遊んだり、やさしいお坊さんだというイメージを、私たちが多くの人が持っているわけですが、その子供たちと遊んだ良寛さんがなぜ、「道元禪師以来の巨匠」になるのか。これはなかなか難しいところではありますけ

れども、本日は良寛さんの歩まれた足跡、生い立ちから青春時代を通して、なぜ、一乞食僧こつじきそうで、お寺の住職にもならず、托鉢で各地を巡り歩いて人々と接し、子供たちと遊んだ良寛さんが巨匠なのか。そこについてお話ししていきたいと思ひます。

良寛さんは、江戸時代後期、新潟県の中部海岸にあります、出雲崎という町の名主の長男に生まれました。

ここ出雲崎には、良寛堂というお堂が建っております。大正十一（一九二二）年に良寛さん生誕の地を記念して建てられたものです。今から約百年前の建立であります。すぐ裏手には日本海。そして、その向こうには、今年世界遺産の推薦になるといわれている佐渡金山がある、佐渡島が見えます。この佐渡は良寛さんのお母さんの故郷です。

この出雲崎は、江戸時代、北前船の寄港地として栄えました。何十万俵というお米が、ここから北前船に載せられまして、大阪や江戸へと運ばれました。また、宿場町として、北国街道の重要な場所でもございました。元禄二（一六八九）年、松尾芭蕉が『奥の細道』の途中、ここに泊まりまして、「荒海や 佐渡によこたふ 天の河」と詠みました場所は、まさにこの出雲崎でありました。ですから、非常に俳句が盛んで文化も高く、新潟県の中でもたいへん発展した場所でもございました。この長男として、良寛さんはお生まれになったわけではす。

それでは、良寛さんのお父さんとお母さんについてちょっとお話ししましょう。お母さんは、先ほども言いましたように、向かいの佐渡、相川の山本家と言ひます

けれども、その分家筋から養女で入られた方です。そして、お父さんは、重内(じゅうない)以南(みな)という方で与板町というところから、お婿さんとしてここに迎えられました。お父さんは俳句がたいへん上手で、俳人としても知られています。これは芭蕉の影響を受けていますね。それからお母さんの方は、佐渡相川の山本家は非常に観音信仰の強いお宅でした。良寛さんのお婆さまも、佐渡の相川の大乗寺観音堂に二体も観音様を寄贈されているという、非常に信仰心の強いお家でお生まれになりました。良寛さんが生まれたのは、宝暦八(一七五八)年、江戸時代後期です。長男として生まれたわけですが、たいへん物静かで、読書好きで、あまり人と遊んだりということはないようでした。そういう点では、本を読むのが一番の楽しみというような子だったようです。

少年時代の良寛さんが、海のそばの岩場の上で物思いにふけっている風の絵があります。これは、良寛さんが小さいときのエピソードとして、大変有名なお話を題材に描かれています。良寛さんは、少年時代は栄蔵という名前でした。この絵のエピソードというのは、あるとき栄蔵さんは、寝坊してきたのです。そして良寛さんのお父さん、以南(いなん)さんは、寝坊してくるとはなんとということだ、ということでした。ところが栄蔵少年は、それを上目遣いで睨んだといいます。上目遣いで睨むというのは、いわゆる反抗的な、何か不満があるときにするしぐさだと思いますけれども、それを見てお父さんは、親を上目づかいで見るとは鱧(かいらい)になってしまおうぞ、と叱ったわけです。鱧というのは魚ですね。鱧は、目が二つ、上を向いています。そういうことで、鱧になるぞと言って叱ったわけです。

ところが夕方になってみると、栄蔵少年の姿が見えない。それでみんな大騒ぎとなりまして、家の方々みんなで、手分けして町中を探します。その中のあるお一人が、浜辺に行ってみたら、海岸の岩の上で、物思いに沈んでいる栄蔵少年を見つけたわけです。「栄蔵さん、どうしたんですか」と言ったら、栄蔵少年は、「おれはまだ鱧になってないか」と、こう言ったといいます。つまり、お魚になったらすぐ海に飛び込めるようにと、この岩の上にたたずんでいたのです。この一事というのは、良寛さんの、物事を疑いもなく信じるという性格をよく表しているような気が

がいたします。

良寛さんは本当に学問が好きでして、良寛さんが栄蔵少年時代に、一番大好きで読んでいた本というのが『論語』です。漢字ばかり並んでおりまして、今から見ますとたいへん難しい本を学んでいたのだなという気がしますが、これが愛読書だったのです。私も高校生の時に論語を学んで、「巧言令色、鮮やかな仁」という、短い一文ですけども、それをおぼえています。おべっかばかり言っている人に、本当の徳や思いやりのある心を持っている人はいないよ、という意味です。

人間としてまっすぐに生きることを教えているのが『論語』であり、『孟子』でもあります。この『論語』『孟子』あるいは漢詩などを、素晴らしい学力で教えてくれたのが、出雲崎から二十キロほど離れた、燕市地藏堂にいらつした、大森子陽先生でした。良寛さんは、大森子陽先生の主催する三峰館という塾に入ったわけです。三峰館は、「三つの峰」と書きますが、これは弥彦山・国上山・角田山という三つの峰々が越後平野から見えるために、名付けた名前だといわれております。

この大森子陽先生と出会ったということは、良寛さんの出家にもかかわってきているような気がいたします。大森子陽先生は漢学者ですけども、実は曹洞宗のお寺で、少年時代に漢学を学ばれました。ですから、良寛さんは坐禅なんかも、もう三峰館で触れていらつした可能性があります。子陽先生は人間性は、高潔でまっすぐな人。勉学に熱心で、江戸に偉い先生が来られて教えているというようなことを聞きつけると、塾を休講にして江戸に出かけて『論語』を学ばれたり、また『孟子』を学ばれたり、漢詩を学ばれたり、このような熱烈な、本当の意味での漢学者でありました。

そういう意味では、この大森子陽先生と出会われたということは、終生にわたって良寛さんに大きな影響を与えているように思います。学問というのは実人生の中で生かさねばならない。そして、人々が幸せになる手立てとして学問はあるべきだ、というお考えでした。この影響というのは非常に大きくあったと思います。

そして、塾で学問することはもちろんですが、良寛さんは下宿をしていましたが、

ここでも一生懸命学んでいました。その部屋が現存しておりますが、中村家という、良寛さんの親戚筋に当たります。この親戚のお家に六年間寝泊まりして、塾が終わって夜帰ってきて、ここで夜遅くまで行燈に油をさして、その明かりで『論語』とか『孟子』とか、あるいは中国の古典を学んでいらっしやいました。そして、夜が長いなんて思わなかった、つまり朝方まで、勉強を夢中でやられていました。勉強が楽しくてならなかったのですね。

そしてもう一つ素晴らしいのは、この塾で友人ができたことです。少年時代はあまり友達もいなかった良寛さんでしたけれども、本当に親しい友人ができて、一緒に学んで塾に行つて、机を並べて学んでいたといひます。本当に水を得た魚のように、十三歳から十八歳までと言われておりますけれども、この六年間を充実して過ごされたようです。今も良寛さんが学ばれたお部屋が残っているというのは、もう奇跡的でございます。

そのような頃のことをふり返つた詩を見えますと、この頃から実は、仏門に入りたいという願ひを持っていたことを書かれています。漢学塾の先生になりたいという思いも一方ではあつたようですけれども、仏門に入りたいというのがやはり強かつたようです。つまり、少年時代から仏の道に進みたいという思いは強く思つていらつしやつたようです。

そして十八歳になりましたとき、長男で生まれておりましたので、良寛さんは山本家の跡継ぎとして、名主見習いとして出雲崎に帰ります。でもやはり良寛さんは、名主見習い、今でいえば助役さんや副市長さんのような役割を果たす係ですけれども、それは性格的に向いていなかったようです。なかなか上手くいかない、そのような逸話が残っております。

あるとき、出雲崎の代官所と、そして漁師さんに争ひがありました。ここ出雲崎は、漁師町でもありました。その時に、調停役に立つた良寛さんは、代官の言う漁師さんの悪口はそのまま伝え、漁師さんが、「代官はなんてことを言うんだ」と怒つたのをそのまま、「代官さん、漁師たちは今、こう言つて怒つています」とそのまま伝えるというふうなことで、町はますます混乱してしまつたということが伝えら

れております。

そのとき、良寛さんはある面では挫折を味わつたのではないかと思ひます。学問で学んだまっすぐな道、正しい道が、現実社会では通らないのだということも知つたと思ひます。そのとき良寛さんは、二枚舌を使うものが賢いといわれる世の中は間違つていると言つたといひます。これはどの時代にも共通していることではないかと思ひます。

「玉虫色にまとめる」なんていうのはよく使われる言葉ですけれども、あつちがいいことを言い、こつちがいいことを言い、全然逆のことを言つても、それでなかなあでまどめてしまふのが世の中の常とすれば、それはやはり筋が通らないと、まっすぐな考え方を持つていたのが良寛さんだつたのではないかと思ひます。

そして十八歳、名主見習いをやつて間もなく、良寛さんは、私の本来の希望は、仏門に入つて人々を救ふことだと、やはりこれを捨てきれないということと、ついに、家を捨て、親を捨て、そして、お寺に駆け込むわけです。

良寛さんは、光照寺というお寺に駆け込んで出家します。このお寺にある石碑には「良寛禪師剃髮之寺」と、こういう風に書かれております。お盆の旧暦七月十七日の夜、出雲崎おけさの輪に加わつて踊つていた良寛さんは、明け方まで夢中で踊つて、そしてその足で、翌十八日の朝にここに駆け込んだといひます。このお寺の階段は、その時の階段そのままです。やはり、この階段を登るにあつて、不安と希望をなげまぜにして、お寺へと駆け込んだのだと思ひます。

この光照寺は良寛さんが小さいときに、寺子屋で漢学を学んでいたお寺でもありますし、遠い親戚の方が隠居さんでいらつしやつたという関係もあつて入られたと思ひのですが、やはり、禅をやりたい、禅を修めたいというのが、良寛さんの心の中には強くあつたようです。

そして、ここで一つ共通点があります。良寛さんのお母さんやお婆さんの実家は、観音信仰が強かつたということを行いましたけれども、光照寺にある石碑を見ますと、「観世音菩薩」と書かれております。光照寺の御本尊は観音様なのです。やはり観音様への信仰というのは、心の奥底に強くあつたように思ひます。十八歳とい

えば、今でいえば大学一年生くらいでしょうか。そのころ名家と言いますか、名主、伝統のあるお家の跡継ぎが、家を捨ててお寺に入ったということは、大きな決断であったと思うわけです。

そして、ここで四年間、沙弥しゃみといえますけれども、小僧さんのような形で、住職さんにお仕えていたようでもあります。法事があればついて行って、お経を一緒にあげたり、あるいは、鳴り物という楽器のようなものを、ガンと鳴らしたり、小僧さんというのはいろいろ忙しいそうです。そういう中で、仏教の本も読まれていたと思います。

そうして、四年間があつという間に過ぎました。その時運命の出会いがありました。このお寺の住職さんは、玄乗げんじょう破了はりょう和尚わうという和尚さんでしたけれども、四年過ぎたときに、そのお師匠さんである大忍国仙和尚だいじんこくせんわうが、岡山県玉島の円通寺からはるばる、この光照寺にこられたわけです。

光照寺の住職さんのお師匠さんが、この大忍国仙和尚だいじんこくせんわうだったわけです。そして、ここで夏安居げあんこという、夏の九十日間にわたる厳しい修行会の指導者として、人々を導くわけです。良寛さんも一修行者として、そこで九十日間修行するわけです。

終わりの頃でしょうね。「玄乗破了さん、ぜひとも、お師匠様のお師匠様である大忍国仙和尚の下で修行をしたい」と申し出るのです。これもまた大決断でございます。国仙和尚に申し出たところ、国仙和尚もやっぱりこの良寛さんの修行の様子を見ていて、これは人物だ、という風に、認めていたわけです。それで、ちよつと変則的な形ですけども、正式な得度とくどをして、大忍国仙和尚のお弟子さんとなるわけです。

その時の様子を描いた絵では、国仙和尚さんの前に座る良寛さんは、白い着物を着ています。得度式をやるときは、この白い衣で臨むのが通例だそうです。夜にこのような形で、剃刀で頭を剃って、正式なお弟子さんとなったわけです。

そしてこの時の誓いというのが、非常に重いものがあります。人々を救う、「衆生無辺誓願度むへんせいがんど」人々を彼岸、苦しみの無い心持にもつていく。それが仏教の第一の目的だというならば、本当に物事を心から信じる良寛さんはこの時、強い堅固な志を

もつて、この速く離れた岡山で修行してみたいという思いを、一層強めて旅立つたと思います。

良寛さんはこの時四年振りに、お別れの席で父母兄弟と再会します。そして、一族の人たちは、出雲崎の町はずれの蛇崩じやくぶせという丘の上で見送ったといわれています。その時の様子を、良寛さんは長い長歌という歌で遺しておられます。これはちよつと長いので、お母さんの部分だけ取り上げて読んでいきます。なぜならば、普通ならお父さんを先に書くのが、封建時代である江戸時代の普通だと思うのですが、なんと、お母さんからスタートしているのです。いかにお母さんの影響が大きかったかわかります。それでは、原文を長歌の読み方で読んでいきます。

〈出家の歌〉

草枕 たびゆく時に

たらちねの 母にわかれを

つげたれば 今はこの世の

なごりや 思ひましけむ

涙ぐみ 手に手をとりて

わがおもを つくづくと見し

おもかげは なほ目の前に

あるごとし

これは前半部分でありますけれども、良寛さんが、「お母さま、これから岡山の方へ修行に出かけます」という風に告げましたところ、お母さんは、もう手に手を取って、ただじつと息子の顔を見て涙を流すだけだったといえます。母の思いですね。

また別の詩にはそのとき、母は私の頭をなでてくれたというのが出ています。本当に母の愛というのが強くうかがえるのが、この最初の部分の歌です。そして一番最後にも母のことが詠まれています。

母が心の むつまじき

そのむつまじき みこころを
はふらすまじと 思ひつぞ
つねあはれみの ころもち
うき世のひとに むかひつれ

お母さんの、親しく優しい心をダメにしないようにと、そのとき思ったのです。お母さんは非常にやさしい心を持った、思いやりのある方なのです。『つねあはれみの ころもち』と、いつも、困っている人や苦しんでいる人がいたら、憐み・慈悲の心をもって、浮世の人に対していこう、と、もう二十二歳でこのような決意をされているのです。

このような和歌を詠まれていますけれども、大変な決意をもって国仙和尚一行に加わりまして、長野、そして名古屋、大阪へと旅立っていきました。出発したのは栗のイガが落ちているころといえますから、旧暦の八月（現在の九月）、そして岡山県玉島の円通寺に着いたのが、旧暦の十月ころと言われております。国仙和尚ゆかりのお寺が信州や名古屋には多くありましたので、その寺々に寄りながら岡山に着いたのだと思います。

良寛さんが修行した、岡山県倉敷市玉島の円通寺本堂には、茅葺の屋根が江戸時代のまま残っています。その傍らには良寛さんの若いときの像が建立されています。岡山県玉島の方々は本当に良寛さんへの尊崇の念、尊敬の念を非常に強く持つてらっしゃる方が多く、若き修行者である良寛さんのお像を建てているのです。鉢と杖をもった姿のお像でして、このような形で、良寛さんは托鉢して歩いていました。本堂に、ある面では、人生というのは出会いで作られていくというような感じがいたします。国仙和尚という大禪僧、すばらしい禪僧と出会って、良寛さんはこの玉島の地でその指導をいただきながら、熱心に修行したわけです。

良寛さんは、ここでどのような修行生活をしていたのでしょうか。円通寺本堂のご本尊は、これもまた聖観世音菩薩、観音様であります。星浦観音と言われておりますけれども、行基作ぎよきと言われ、奈良時代に造られたという言い伝えがありまして、

昔からここは観音様を信仰するお堂があったところです。それを江戸時代中期、衰退しているところに、徳翁良高とくおうりょうこう禪師という禪師様が、加賀の大乗寺から来られて、ここに円通寺の前身である円通庵を再興されるわけです。非常に伝統のあるお寺であったということが出来ます。

国仙和尚は、ここで難しいような講義をされたりそういうことはあまりなさらないで、一番大切にされたのは坐禪、作務さむでした。作務というのは、お掃除をしたり、芝を運んだり、そのような作業のことです。それらを無心でやりなさいと、これがやはり一番大事にされたことのような気がいたします。

もちろん本堂でお経をあげることもありましたでしょう。もちろんそのような儀式というのは大事にされているわけですが、坐禪修行というのは、これは曹洞宗を開かれた高祖道元禪師が、やはり大切になさいと教えられたことです。

坐禪をする、座るだけなのですけれども、外部からの情報を遮断して、無心に座ることによって自分と対話する、自分とは何者なのか、それをとことん突き詰めていくのが、坐禪修行ということと言っても過言でないかもしれません。

ある面では、近代の人間が大事とされた自我、この小さな我というのを捨て去る作業が、この坐禪のような気がいたします。そしてもっと大きな、宇宙のような大きな心にだんだんと近づけていく。ある面では、エゴイズムというのは人類を發展させてきた側面もありますけれども、またエゴイズムというのは滅びにつながる一つの所業であるということは、現在の地球の状況からみても、すぐわかることでもあります。

坐禪、あるいは無心に食事を作るときは無心に食事を作る。拭き掃除するときは無心に拭き掃除する。そのようなことから、徐々に大きな心を、良寛さんは身にかけていったようです。

良寛さんが修行を始めて十年ぐらいたった時に、お師匠さんの国仙和尚が良寛さんに与えた印可いんかというものがあります。簡単に言いますと、確かに悟ったということを実証する詩であります。なかなか難しい漢詩が書いてあるのですが、これを良寛さんは、亡くなるまで大事に持つてらっしゃいました。

曹洞宗では仏の教えを、お師匠さんからお弟子さんへ、水を移すように弟子にならなければならない。それでなければ仏の教えはつながらないという、これを鉄則にしておられます。そういう点では、お師匠さんから水をそのまま受け継いだように、それを正しく証明してくれるというのがこの印可の偈だということで、大事にされていたのです。

最初の一行には、「良や愚の如く道転た寛し」と書いてあります。簡単に訳してみますと、「良寛よ、おまえは一見すると本当に愚か者のように見えるけれども、それほど小さな我・エゴイズムというのを捨て去って、大きな仏道の道を体得して、どこまでも広い心を持っている」という意味です。

「転た寛し」というのは、「どこまでも広い」ということ。さきほど、心が宇宙のように広いという、ちょっとオーバーな表現をしましたけれども、そこには、自分だけよければいいというようなそれが本当に無かったのだと思います。

でもこれは、例えばある時レジに二人同時に並んだ時に「どうぞお先に」と、多くの日本人はさつとそういう言葉が出てくることが多いです。あるいは何か成功してうまくいったとき「皆さんのおかげ様です」と、これは多くの方がおっしゃる言葉ですけれども、そこにこの「寛し」というものの、普遍的な、長い間、仏教あるいは東洋思想に支えられた大事な思想が、何気ない形で生活の中に生きているのではないかと思うわけです。

そういう点では、無心にとってもつい雑念が起きたりしますけれども、そこをまた一から元に戻ってそのものになりきる、そういう修行を重ねられたと思います。道元禪師が『正法眼蔵』という本の中に、「身心脱落」という言葉を述べてらっしゃいます。身も心も自分から剥がれ落ちていくような世界、そうすると、なんとすごい大きな世界に生きていることになります。

どうしたらこの悟りの世界というものを、現代の大学生に分かってもらえるかと思つて、自分なりに考えてみました。宮沢賢治の『雨ニモマケズ』という詩は、皆様方もご存じだと思いますけれども、ここに「ジブンヲカンジョウニ入レズニ」という一文が出てきます。でくの坊と思われたってそれでいいと、苦にもされないで

生きていく、と。本当に宮沢賢治という人は、特に学んだわけではないですけども、近代において、良寛さんの精神と最も共通のものがあると思う人ですけれども、自分のことを勘定に入れないというのは、さきほど言いましたが、宇宙大の心、そのような心で人々の幸せを祈るという方向へと、初めて慈悲というものに転化されていくのです。宮沢賢治も農家の人々が幸せになるように、肥料の研究をされて、ついに体を壊して若くして亡くなりましたけれども、まずは大きな我に気づき、そして生かされている我に気づく。印可の偈の二行目には「騰々任運」という言葉が出てきます。やはり、大きな仏様の意思に任せていくと言いますか、偉大な大きな宇宙の意思に任せて生きる、そのような心というのが、広い心から、今度はいきいきと生きてくると、悠々たる生き方というのが出て来たような気がいたします。

そして国仙和尚は、山から藤の木を伐って、悟ったことを証明する杖を作つてきて、「お前にあげるよ」ということで、円通寺の銅像の良寛さんが持っている杖は、国仙和尚が良寛さんに、悟った証明におあげした杖なのです。お前はこれからも、この杖について自由自在に生きていくだろう、眠つてるときもおそらく「閑」、心は空っぽで、のびやかでのどかな心持ちで生きていくだろう、と言っているのです。

この「閑」というのは、「静か」とか「のどか」とか、もつと端的に言えば「空っぽ」。空っぽというのは悪いことのように見えるのですが、本当に鏡のような心になりますと、すべてのものを写すことができます。自分の小さな悩みとかに苦しんでいると、周りのものもすべて入ってこない。素晴らしい人と出会つても、素晴らしいことに気づかないで終わってしまう。そんなことがあるような気がするのですけれども、こんな気持ちこそ、この円通寺時代にやはり体得していかれたわけです。

印可の偈を見ますと「良寛庵主に附す」と書いてあります。この印可の偈を書かれたこの頃、良寛さんは寺の住職にならないという意思表示をしていたと思うのですけれども、国仙和尚は、そうか、それなら自由に任せてみよう、ということ、本当は自分の隠居所であつた覚樹庵、悟りを開いたお釈迦様にちなんだ覚樹庵という名前の隠居所を与えます。住職さんしかここに入っちゃならないのに、国仙和尚は新たに水月庵という庵を作つて、良寛さんは住職もしていないのに、庵をお貸し

になったのです。

良寛さんは、それをありがたくお借りして、諸国行脚の旅に出ます。ある面では、お寺の生活というのは現実からかけはなれておりますので、本当の娑婆しやばで人々はどうなふうに生きているのか、その中に全く一人で、独り立ちして現実社会の中に入っていないかれます。

このきっかけとなったのが、国仙和尚が示された道元禪師の著述でした。その中の、『行持ぎょうぢ』という章の中には、中国の多くの高僧たちの生き方が書かれています。ああ、高僧たちはこういう生き方をされていて、独立独歩を自分もやってみよう。今までちょっと、肩の力が入りすぎていたかな、というようなことを反省して、諸国行脚の旅に出ます。これはやはり、托鉢で得たお米・錢を糧として命をつなぐ旅です。命がけの旅と言つていいかもしれません。

そのような中で、最初に選んだのが四国だったかと思われれます。土佐の高知で、近藤万丈という方が、たまたま雨宿りをしたところに、宿を貸してくれた越後出身の「了寛りょうかん」さんと出会ったことを記述しております。そして、国仙和尚が亡くなったから、紀伊半島を回られているかと思われれます。いろんな和歌・俳句・漢詩が残っております。吉野山、高野山、そして伊勢、和歌の浦。その当時には、須磨、明石、あるいは大阪で言いますと弘川寺という、西行法師の墓があるお寺にもお参りしています。後半の旅はかなり和歌・俳句・漢詩が入ってきました。余裕が出ている感じがいたします。

良寛さんも訪れた高野山は、弘法大師空海が開いたお寺で、奥の院には大きな杉の木、そして、織田信長・豊臣秀吉・上杉謙信公などといったお墓がいっぱいあります。ここにも行つて詩を作っています。「もう衣がボロボロで、霞のようになっていられるけれども、衣を買うお金がない」という詩です。

吉野山では、なかなか泊めてくれる方がいなかったので困っていたところ、あるおじいさんが、泊めてもいいということを書いてくれたので泊まったら、夜なべ仕事をされてきました。これは何ですか、と見ると、竹細工でかごを作っていたのです。それは蔵王権現のお祭りの時に、これをお土産として売って、そして稲のもみ殻と

かいろんな植物の種をここに入れて下げておくと実りがいいといわれている縁起物のものだと思います。では私にも譲ってください。土産にしますから、といって、良寛さんは俳句を一句作っています。「苞むすぶにせむ よしのの里の 花がたみ」苞むすぶはお土産という意味です。竹籠を土産に、一宿一飯の宿賃代わりに、おそらく一文をお払ひして、小さな小さな竹籠を土産に買ってきたというものです。ちょうど松尾芭蕉の『奥の細道』のような旅日記が、わずかですけれども肉筆で残っています。そのようなことをして、のちに越後に帰つて五合庵で一人住まいをするのですけれども、その原型というのがもうこの円通寺時代後期には出来上がっていたといつても良いかもしれません。これが七年くらいにわたつて続けられました。

円通寺修行時代にお母さんはもう亡くなっていました。別れてから五年後ぐらいのことです。これは悲しかったと思います。仏の道に導いてくれたとも言つていい母は早く亡くなっています。そして、三十八歳の時に、良寛さんに大きな出来事が起こります。三十八歳のとき、良寛さんのお父さんが京都の桂川に投身自殺をしているのです。

以南は、京都に出て俳句で一旗揚げようというような思いがあつたといわれていますけれども、なかなかうまくいかない。俳句を高く評価し、書を買ってくれる人も、恐らくいなかったでしょう。越後だけに、以南が京都で書いた作品が残っています。越後に作品を送ることによって、謝礼と言いますか、代金を送ってもらつて、京都での生活を何とか続けていらつたのでしよう。しかし、脚気になられて、以南はふるさとにもう歩いて帰ることもできそうにないということで、桂川に身を投げたといわれています。

以南が亡くなった時、兄弟や親戚が全部越後から京都に集まります。良寛さんも呼び出され、法要をやるわけです。その時、何十年ぶりに良寛さんは家族と再会するわけです。故郷が懐かしいという思いが、このとき非常に強くなりまして、良寛さんは、三十九歳の春に越後に帰ってくるわけです。そして住庵したのが、五合庵という小さな小さな庵でありました。

この五合庵は、真言宗国上寺こくじょうじというお寺の、住職さんの隠居所かくじょ所でございました。

国上山という、標高三百メートルくらいの山の中腹、百メートルくらいのところはこの五合庵はあるわけですが、周りは自然の真つ只中です。

今、山の中にキャンプに行つて、火をつけて水を汲んできて、食べ物を焼いて食べる。自然というのは何と素晴らしいのだろうと、そういうキャンプブームというものもが起こっていますけれども、良寛さんはこの自然の中に、二十年近くこの五合庵で暮らされるのです。

のちに良寛さんは乙子神社草庵でも十年くらい暮らしますから、こんな山奥で三十年近くも草庵暮らしをされているのです。なぜお寺の住職にならないで、このような道を歩まれたのか。それはやはり、良寛さんは四国や紀伊半島、西国三十三札所、そのような現実社会で歩かれて、本当に仏の道を教えるには、一対一で民衆に対して、そしてそこで仏の道を伝えていく道しかないのではないかと、そういう思いを強くされたのではないかと思います。ですから、あえて托鉢という手段を取りました。

托鉢する際の鉢、鉢の子といいますが、毎日この鉢の子を持って、里へ下りて行つて托鉢をしました。良寛さんは全部ひとりで衣食もやっていましたから、朝まずは薪を伐つて持つてきたり、谷川から水を汲んでくる。そして、昨日いただいたお米をおかゆにして食べる、あるいは雑炊にして食べる。畑を作つていて、大根の葉っ葉をおつゆの中に入れる。そのような朝ごはんが終わつたら、里へ降りていったわけです。

家を一軒一軒回しまして、簡単なお経を唱えると、この鉢の子の中にチャリーンと、一文をお布施してくださいさる方もいらつしやるだろうし、一握りのお米をくださった人もいるだろうし、これを命の糧として生活をしていきました。

ある面では、一番厳しい道を選択されたということが言えるかもしれません。この布施というのは、道元禪師が『正法眼蔵』のなかで、四つの人々を救う方法というのを取り上げていますけれども、その一つに布施が出ています。

貫つてばかりで、一方的に人のご厄介になつていのではないかと思ひになるかもしれませんけれども、そうではありません。良寛さんは言葉の布施というのを

逆にお返ししています。たとえば、だんだん親しくなつてくると、良寛さんにいろいろなことを相談する人も出てきます。そうすると、やはりいろいろ相談に乗つてあげたりアドバイスしたり、またあとで話しますけれども、「戒語」というのをよく人々に語っています。

「戒語」、ことばを戒める。ささやかですけれども、人々の仲を取り持ち、人の關係を悪くもし、良くもする言葉を大切にすることによって、世の中を平和な良い世の中にしようということですよ。例えばいつも出てくるのが自慢話、長話。これは必ず出てきます。その人にとっては気持ちが良いくて、うちの息子はこの度どうしたとかこうしたとか言つて、とうとうと語る方もいらつしやつたかもしれません。でも、自慢話を聞いている人は、それはそれは嫌なものです。自慢話、自己顕示欲。先ほど言いましたエゴイズムにつながるものですね。そんなこと言わなければ、人も静かにいろんなことに耳を傾けているのに、「また始まつた」なんていうことになつてしまふわけです。せつかくのいい人だったのにもつたないことになつてしまふます。

そんなことで、良寛さんは托鉢をして言葉の布施をして、何とか命をつないでいました。しかし、物は持つていないのです。「清貧」の生活です。それで、ある時、町の市場あたりに托鉢に出かけましたら、ある女性の方が子供を連れていて、「お坊様、うちの主人は昨年の暮れに出稼ぎに行つたのだけれども、帰つてこないんです。子どもも小さくて困っています。何か恵んでくださいませんか」と頼みます。良寛さんは「私はこの通り何も持つてない身でありますので、私の友人に頼んでみましょう」と友人に手紙を書いてくれました。解良叔問さんという良寛さんの友人の方がいまして、良寛さんがその方にあてた手紙を見ますと、「この人に何か恵んでください」と書いてあります。そして、しばらくして良寛さんが叔問さんに宛てた「この度はお餅を与えていただきありがとうございます」という札状があります。解良叔問さんは良寛さんの依頼を受け、この女性に餅を与えてくださったようです。

そんなふうには、いわゆる人々を救うということはどういうことか、それは心の

を救うことも救うことですし、そして、本当に飢餓に苦しんでいる人も救わなければいけない。良寛さんは現実の中で、非常にうまくいかないことも多くて、悩み苦しんで仏さまに救いを求めるといふ歌も詠んでいます。どうかお救い下さい、と悲痛な叫びのこもった歌もあります。良寛さんは、そんな中で生きていたようです。良寛さんは越後平野を托鉢して歩かれて、夕暮れ時に、鉢の子をもって、とほとほと帰っていかれます。そしてこのここにあるのが国上山です。ここに帰られました。

なかには、一粒の米も銭も入っていない日がありました。そういう詩が残っていますけれども、それはそれは厳しい生活でありました。俳句にこんなものがあります。「鉄鉢に 明日の米あり 夕涼み」。「鉢の子に今日はお米をいただいて、明日おかゆが食べられそうだ、ああんとなちよつとほつとしたな、今日は夕方夕涼みをして、ちよつとらつくりとしてみよう」といふ俳句です。良寛さんは、そんな中に生きてらっしゃったのです。

また、五合庵に泥棒が入ることもありました。越後平野はコシヒカリで有名な美田地域ですけれども、その中央に日本一の大河、信濃川が流れています。信濃川は大きな利益もたらしますけれども、数年に一回洪水が起きます。そうすると、洪水で米が取れないというような年が四、五年に一回あったのです。食べるものがないということ、洪水の年は盗人がよく出ました。五合庵にまで盗人が来て、見たら何も盗るものがない。しかし、良寛さんは、物をあまり持たない、がらんとした清貧の生活です。それで良寛さんは、泥棒も困っているだろうということで、布団からゴロゴロゴロゴロと転がって、布団を盗みやすいようにしてあげるので、それで泥棒さんは、布団があったということで、布団を巻いて山を下りて行ったということ、です。

その時詠んだ俳句が「盗人に 取り残されし 窓の月」。泥棒が帰った後、ぼつねんと床に座っていた良寛さんの目の前に、お月さんが煌々と光っていました。「ああ、泥棒は行ってしまって、五合庵はがらんとしているけれども、お月さんと私だけがいまこの朝方ある」といふ、そういう俳句を詠んでいます。

こんな生活が何十年も続いていきます。時には農家のおじいちゃんや田んぼのあぜ道で、「あんたも一杯飲んで、私も一杯飲もう」といふ風に、お酒を酌み交わすこともあったといひます。やはりなかなか口の重い人たちです。お互いに飲んでるうちに、「実はこんなことがあつてのう、本当に困つてるんだわ」といふようなことで、話をすることもよくあつたようであります。

良寛さんが子供たちとよく遊んだという話の中で、手毬の話は大変有名で、また後でもお話ししますが、本当に良寛さんは托鉢の道すがら、子供らと手毬をついたり、おはじきをしたり、草相撲をしたりして遊びました。

良寛さんが行くところには、子供たちがぞろぞろ群れを成してついてきたといいます。やっぱり子供は、純な心を持つている良寛さんは、「ああこの人は信用していい人だ」と分かるのでしよう。そういうなかで、良寛さんはよく春に山里に連れて行って、一緒に山桜を見たり、すみれの花を見たりすることが多かったようです。自然の美しいものを一緒に見よう、と。ある面ではこの子たちは小さいときから美意識が研ぎ澄まされていたのではないかという風にも思います。

私が、良寛さんと子供たちとの逸話の中で好きなのが、かくれんぼの逸話です。朝、稲わらの中に良寛さんがかくれんぼしています。昨日の夕方にかくれんぼをしていたのですけれども、ずっと朝まで隠れて、そのまま寝てしまった。朝になって、おばあさんが藁を取りに来たら、良寛さんが隠れているので「あら良寛さんどうしたんですか」と聞きましたら、「シーツ、鬼に見つかると言つたといひます。

つまり、かくれんぼの鬼は自分を見つけに来るだろうと思つて、ずっと信じて隠れていて、朝方まで寝込んでしまつたわけです。もちろん、子供たちは夕方、お父さんやお母さんが呼びに来て、ほらご飯ができたよ、というようなことで、みんな帰つてしまつて居るのですけれども、良寛さんはずっと信じて待つていたわけです。

この逸話をすごく好きだといふことで詩を作られたのが、大正時代、詩や短歌で有名な北原白秋でした。このかくれんぼの逸話に心を打たれて、次のような詩を作っています。「良寛さまはお坊さま 子どもの好きなお坊さま 子どもみたいなお坊さま なんとこのろまのお坊さま なんと仏のお坊さま」

人を信じて疑わない良寛さんの心は、ある面では非常に子供のよな心を持っていたように思います。ある人が、良寛さんはどうしてそんなに子供が好きなのだ、と言ったら、良寛さんは、子供は純で偽りがいいからだ、と言ったといひます。逆に言えば、そんな子供たちもいつのまにか大人になると、この純真な心を失ってしまつて、人をだましたりという大人になっている人もいられるかもしれません。やはり良寛さんは純な生き方というのを大切にしたいということが出来ます。

それでは、良寛さんは子供たちとだけ遊んでいたのかというと、そんなことはありません。和歌などを通して、大人にもちゃんと仏の教えを伝えようとしています。

良寛さんは書でも大変有名な人で、良寛さんの作品は、阿部家に伝わった作品が国の重要文化財に指定されていますけれども、良寛さんは「秋萩帖」という、万葉仮名を使った仮名を四十代から学んでおりました。これがベースになっています。だから書も非常に、もみじの葉が風に揺られて散るような字で、最初に申し上げた、自分というか、我を捨て去った人だけがたどり着けるような、自然に任せた趣があります。書は読めなくても良いのです。抽象芸術として見ても良いと私は思います。

では、歌はどんな内容が書いてあるのかというと、「耳鬢に 秘めおける珠たま久にあるを 今や贈らむ その時にもが」という歌。ちよつと難しい歌ですけれども、要は、人間の心の中には仏様のような、つまり仏性というものがあります。それは先ほど申し上げた、鏡のような心と言つても良いかもしれません。それを、お釈迦様が最後に説法をされたという『法華経』の中では「一顆明珠」、珠という表現を使っています。珠というと、真珠とかダイヤモンドのような宝石を思い出します。ダイヤモンドのように、本当に澄み切つた鏡のような心は誰にでもある。それに早くあなたに気づいてほしいなあ、悟りを開いてほしいなあ、ということを書き与えているのです。

このような、この人には難しい話しても大丈夫だという人には、こんな『法華経』の根幹、『五百弟子受記品』というところに書かれている、「一顆明珠」について触れている歌を詠まれているわけです。

良寛さんは冬ごもりに『法華経』を学ぶことが多くありました。「法華賛」「法華

転」という漢詩も残されていますけれども、これがまた素晴らしい。本当に難しい『法華経』をすべて理解して、ある時はそれにコメントをつけています。これだけの深い理解をしている人は、そう世の中にもいるものではありません。

そして、これだけの実践をされている方だということ、先ほど言いました原坦山さんが、良寛さんは「道元禪師以来の巨匠」だと言つたのは、そういうところから発せられた言葉であつたように思います。

良寛さんが五十九歳の時、五合庵が老朽化して雨漏りをしたりし始めましたので、少しふもとに下がつた乙子神社草庵に移ります。今あるものは再建されたものでありますけれども、五合庵に比べたら一間大きくて、二間あります。そういう点では、ここで大きな書の作品も書こうと思えば書けたわけです。

この乙子神社時代、六十を過ぎて良寛さんは、一層円熟味を増した仏教者に成長していきます。つまり、修行というのはいよいよ深めれば終わりではなくて、その先もまた深い海の底があり、山の高みがあるのです。

どんな風に円熟味を増したかということ、簡単に言うとう光を和らげていきました。立派な方というのは、もちろん凛りんとして、それなりの神々しさというものはあると思うのですけれども、それでは人が近づいてこない。ああ立派な方ですと、立派な方という風に一歩離れてしまうと、そこからはなかなか、人と人、一対一で伝わるものが伝わりにくくなるのです。それで、平凡な人のように、どんと山を下りて、里の巷の人と同じような姿へとまた進むのです。そういう点では、光を和らげるというのは大事な一歩だと思ひます。

その理想的な姿は布袋様です。布袋様も、頭陀袋ずだを担いで腹を出して、町の市に出かけて人々と色々話をして、あとは頭陀袋の中にもつたものを担いでまた帰つていく。あの姿は、やはり良寛さんの一つの理想であるように思ひます。

そして、『法華経』に出ている観音菩薩の行いは、良寛さんの手本となるものであつたと思ひます。観音様というのは、苦しんでいる・悲しんでいる人の声を聴いて、そのもとに駆け付けて救つてくださる。自分は埃まみれになり、泥まみれになつても、人々が救われることを一番の喜びとしていらつしやつたのだと思ひます。

そういう点では、良寛さんの理想像というのは、観音様の菩薩行であり、そして、布袋様のあの悠々たる世界、そして、先ほど出た子供たちのことと言えば、お地藏様への敬意です。良寛さんはお地藏様を持仏として持っていました。いつも枕にしていたので枕地藏と言われています。お地藏さまは、子安地藏という言葉がありますように、子供たちが無事に育つように守ってくれています。あるいは、一番弱い人を、地藏さまは救ってくれるといわれています。

円通寺には、金銅でできた大きなお地藏さまが立っています。そして、やはりお地藏さまという子供に比べるとイメージとして持っていたのです。

この頃は、書を書き、そして和歌を詠み、漢詩を詠みという風に、非常に文芸の方にも力を入れていきます。このころ読んだのが『万葉集』四千五百首でした。良寛さんはよく万葉調の歌人と言われますけれども、六十二歳の時に『万葉集』を全部読んでいます。ですから、どこか『万葉集』の響きと良寛さんの歌というのは通じるものがあります。

そうすると、「遊戯三昧」という言葉がありますけれども、ひたすら何かをやるというのではなくて、普段の生活の中に自然とやっていることが、それは学ぶことも、遊ぶことも、芸術をやることも、文学をやることも、みんな一つに混然一体となって、悠々として行いをやるという、そんな世界に到達したような気がいたします。

そういう点では、この乙子神社時代というのは非常に大切な時代であったと、一皮むけたという感じがいたします。この時詠まれたのが、「騰々として天真に任す」という、長い詩です。やはり私たちは、「自分が生きている」という意識が、特に若い世代には大きいわけですが、生かされている、大きな宇宙の法則の中に生かされている、そのことによって支えられて生きている面というのは、年を取ってくるとだんだん見えてくるわけですが、この大きなものに任せるといえるというものが、この頃より一層強くなっていくような気がいたします。

では良寛さんは、托鉢で得た米とか銭とかだけで生きて行けたのかというと、や

はりそれは無理です。そういう良寛さんの厳しい清貧の生活を助けてくれたのは、友人であり、そして漢学塾の時の同級生であり、そして兄弟でした。あるいは甥が手を差し伸べてくれた時もあります。

良寛さんの二歳年下の妹の、むらさんという方が良寛さんに物を送った時の札状が残っています。宛先は女性ですからひらがなを使って、「とやま」とあります。外山さんというお宅に嫁いだので、外山文左衛門という、お酒を造ったり廻船問屋をやっている、ご主人の名前に手紙を出しています。まあ封建時代ですから、やはりご主人を立てているのかなあという気がいたします。

この手紙は、女性でも読みやすいように、易しいひらがなを使うとともに、ごく丁寧な表現をしています。妹に宛てた手紙とは思えないくらい尊敬語を使っています。すごく女性に対して敬意を払っていらつしたのですね。で、この時は綿子という綿の入った着物、それから足袋。こういう衣服は、むらさんは、お兄さんは自分では縫えないから私が作ると言って、あげていたのですね。洗濯もしてやっています。それで、冬ですのでも食べ物もないだろうということで、山芋と海苔と干瓢を送っております。これはもしかしたら、妹だけが知っている良寛さんの好物ではないかと思っています。良寛さんは海苔が好きだったのでね。これは雪海苔というものでして、日本海、春になりますと岩場に付いた海苔を取って、乾燥させて平たい海苔にしているのですけれども、この海苔が好きだったようです。こんな風に兄弟が支えていたのです。このむらさんの良寛さんへの思いというのは、お母さんが長男である良寛さんを大切に育てた、その母の思いを一番よくわかっていた兄弟だったような気がいたします。

ここでまた良寛さんと子供の話になります。特に乙子神社時代になりますと、三条に出かけて托鉢することが多くなりました。三条は本当に友人が多いところでした。縁がありました、私も最後にお勤めしたのが三条の高等学校でした。

よくテレビのニュースなどで、燕三条の金属製品なんていうのが出てきます。これは金属製品のすごく有名な会社がいっぱいあります。あるいはキャンピング用品のスノーピークなんか、この三条です。あるいはノーベル賞の晩餐会に使われた

ナイフ・フォークは、燕の山崎金属工業で作られていました。

この地域は、世界に通用するものを作っていますけれども、それはなぜかという
と、先ほども言いましたように、この地域は洪水が多かったのです。ですから、江
戸時代から和釘を作っていて、洪水になって米が取れなくても生きていけるように
ということ、金属製品が発展していきました。

ここに托鉢に行きますと、良寛さんは、托鉢が終わった午後、八幡さまという神
社に行つて、子供たちと遊ぶことが多くありました。

八幡神社の隣の榎田神社の神官をしていた、五十嵐華亭いからしなていという画家が、良寛さん
を間近で見て描いた絵があります。そこには頭巾をかぶり頭陀袋を持った良寛さん
と、二人の子供が描かれています。頭巾は友達からもらったものです。そして頭陀
袋には大事なものをいっぱい入れておくとともに、もらったものを入れます。

二人の子供が駆け寄っています。一人は手毬を持っていて、良寛さん、手毬しよ
う、というようなことで、良寛さんは手毬が大好きですから、大きいもので野球の
硬式ボールぐらいのもので、膝について手毬つきをしました。小さいものはテニス
ボールくらいです。

なぜ小さいものも使つて遊んでいたかという、良寛さんは袖の中に手毬を入れ
ていました。手毬を持っていない子もいますから、そしたら、じゃあ私の持つてい
る手毬で遊ぼうか、と言って、ここから出して手毬つきをしたのです。

手毬つきをしようと駆け寄つた子に対して、もう一人の子は梅の花のついた枝を
持つていて、これは春ですので、山から雪が解けて、下りてきたばかりの良寛さん
に、良寛さん、梅の花が咲いたよ、一緒に梅の花を見よう、と。良寛さんが一番好
きだった花は梅でした。これは道元禅師も、梅の花が大好きだったようです。『万
葉集』の中でも、梅の花を詠んだ歌が非常に多いのですけれども、良寛さんにはそ
の影響を受けている歌も非常に多くあります。

絵の上には良寛さんの和歌が色紙に書かれたものが貼られています。「この宮の
森の木下に 子どもらと 遊ぶ春日は 暮れずともよし」。「この神社の森で子供
らと遊んでいる春日の日、こんなになどか楽しい日は暮れないでほしいなあ、暮れ

なくてもいいよ」、という歌です。でもまた子供たちは夕方になるとみんな帰つて
いきます。また一人ぼつねんと残されて、良寛さんはとぼとぼと、宿となっている
お寺に帰つていきました。こんな生活は六十代になつても続きました。

次にあげる作品は、今度は良寛さんの書に関わるものです。さきほども、良寛
さんの書というのは、重要文化財にもなっているというお話をしました。やはり良寛
さんの書は、すごく清純で清らかなのです。力みがない。力が入っていない。もみ
じが風に揺られて散るように、本当に自然・天然です。天真に任すという言葉を先
ほど申し述べましたけれども、これは乙子神社草庵に詩碑にもなっているもので、
本当に書も美しい。中身を見るとまたこれが面白いのです。

出雲崎の廻船問屋の主人、関東屋平明(平田弥平)という方が、良寛さんに字を
書いてくれと言っても、良寛さんに「またね、もつと上手になつたらね」と、よ
くこうやつて断られるそうです。あんまり書いてくれないので、良寛さんにちよつ
と策略を練つて、なにか書いてもらえるような、ちよつと怒らすような内容を書き
ました。「良寛さんは仏様のような心を持つているというのに、私に書を書いてく
れないのは、せつかくの宝を持つていないのと同じだよ」という風な、ちよつ
と挑戦的な歌を詠んだのです。そしたら良寛さんは、「かれこれと なにあげつら
む よのなかは ひとつみたまの かげとしらずて」という風に、また珠たまが出てき
ましたが、「何をあれこれ論じているんだい。あんたはまだ、この世の中は仏の光
に照らされているということも知らないのに、仏の道のことを語るんじゃないよ」
と、ちよつと叱つたような歌を、ここで返歌として返すわけです。この平明さんは
しめたとばかりに、この書をもらつて表具して、そしてこれが今に伝わっています。
これは出雲崎の方の問答歌、その人が吹つ掛けた和歌に対しての答えが書かれてい
ます。

良寛さんのどこがすごいのだろうと思うとき、私がいつも思うのは、月の兎の逸
話です。この月の兎の逸話というのは、もともとはインドの逸話でした。

インドから中国を経て日本にわたるうちに、ずいぶん登場の動物も変わっていま
すけれども、兎と猿と狐が昔仲良く住んでいたといえます。これは『今昔物語集』

に出ています。

天の神様が、人間でも種類が同じなのによく仲良くいかにないのに、違う種類の三匹が仲良く、優しく親切に暮らしていると聞き、本当かい。試してやろう、と思つて、地球に降りてこられました。そして、この子たちに「私はもうずっと長く食べ物食べていないんだ。何か私に食べるものを持ってきておくれ」と、こう言うわけです。みんな親切な者達ですから、猿は猿で木の実を持ってきたり、狐は狐で食べ物を見つけてきて、「おじいさん、これを食べてください」と言つて、おじいさんは「ほお、親切だのう。本当に君たちは優しい者たちだねえ」ということで、ところが兎は、「何も見つかりませんでした」といつてとほとほ帰つてきます。それで兎さんは、「狐さん、猿さん、薪を拾つてきておいで」と言いました。何だろうと思つて、薪を積むと、兎さんはそこに火をつけさせます。兎さんは「おじいさん、私は何も見つけられなかったけれども、私はこの火の中に入りますから、私を食べてください」と言つて、火の中に入って真つ黒こげになってしまっています。

おじいさんは「ああ、なんと悪いことをした。みんな親切なものたちだけれども、兎のこの自己犠牲によつて人を救おうという心は、本当に素晴らしいものだ」といつて、兎の亡骸を抱いて、月の国に帰つて行かれました。ですから、お月さんには黒い兎の姿が今も見えるというお話です。これが、もともとはインドの説話ですけれども、『今昔物語集』にある説話です。この説話を讀むと良寛さんは涙が出て、本当にどうしようもなくなったようです。この長歌を讀んで、三条の三浦屋幸助という菓子屋さんに書き与えています。

六十九歳のとき良寛さんは、山での一人暮らしができなくなって、里へ下りてきます。島崎村の木村家というところで、母屋の奥の薪小屋をちよつと改造して、小さな庵にしてみました。ここで四、五年住みます。六十九歳の時に移りました。

ここも体力的にもかなり厳しいものがあつたのですけれども、この六十九歳から七十四歳までの最晩年が、書なんか最も素晴らしいものに進んでいます。よく生涯学習と言いますが、良寛さんはまさに生涯学習の神様と言つてもいいような精進の仕方です。もうこれでいいということではなくて、どこまでも努力してい

かれたのです。

良寛さんが里に下りられたということで、すごく多くの方が訪ねてきて教を乞うようになります。弟の由之ゆゆしさんも、兄である良寛さんが出家したので跡を継ぐのですけれども、家をつぶしてしまいます。それで日本中を放浪して歩いてくるのですけれども、晩年この島崎の近くの与板町に住みまして、そして二人は親しく交流します。やはり兄弟です。これも晩年の支えになりました。

もう一人晩年の支えとなつたのが、貞心ていしん尼でした。貞心尼はそのとき三十歳。尼さんでした。浄土宗の尼僧でした。和歌をやりまして、和歌の女流歌人と言つてもいい方でした。

その方が訪ねてきて、やはり和歌のご指導をいただきたいという思いが強かつたと思うのですけれども、その前にやはり仏教者として一人前の尼僧になつてほしいという思いも強かつたと思います。良寛さんは禅の修行を勧めるわけです。浄土宗の尼僧に、禅的なものを教えるというのは大変だつたと思うのですけれども、半ぐらい、よく貞心尼も頑張つて、良寛さんは禅ぜん尼と呼んでいたようですけれども、その禅尼に後になられます。

そして良寛さんのすばらしさを、良寛さんが亡くなってから『はちすの露』という歌集を作つたり、あるいは「戒語」もその中に九十か条書いてあります。良寛さんのすばらしさを伝えていくのです。

出会つたとき良寛さんは七十歳、貞心尼は三十歳でした。長岡から教を受けに訪ねてこられました。この貞心尼と良寛さんの詠んだ唱和の歌、やり取りをした歌が『はちすの露』の中に書かれていますけれども、本当に素晴らしい歌が多くあります。

やはり、良寛さんもこの貞心尼にいろんなことを伝えたいという思いは強くあつたと思います。もしかしたら最後のお弟子さんの一人であつたのではないかなと思います。このような最晩年に良寛さんの身近なところで大災害が起きます。それは三条地震です。

文政十一（一八二八）年の十一月十二日朝、マグニチュード六・九。震度は三条

周辺は七でありました。死者千六百人、負傷者もそれと同じくらいです。震源地が現在の三条市であったために、三条は大被害を受けたわけです。

三条と言えば先ほど子供たちと遊んでいたのも三条。そして、月の兎を書き与えたのも、三条の菓子商三浦屋幸助。親しい人が多くいました。本当に切なかつたと思います。良寛さんは市日に三条に出かけて、その惨状を目の当たりにして号泣するわけです。

悟った人なら悲しみなんかはない、ではないのです。本当に切ないときは涙を流し、でもそれに引きずられない。良寛さんは地震の後、ダルマさん「起き上がりこぼし」を詠んだ漢詩を詠んでいます。ダルマさんは転んでもまた起きます。起き上がりこぼしのように、いろんなことがあってもまた起き上がるう、そんな詩を読んでいます。

その三条地震の時に詠まれたと思われる歌が書かれている扇子があります。「我が袖は 涙に朽ちぬ 小夜更けて うきよのなかの 人を思ふに」これは「夜中目が覚めたら、涙が流れてならない。袖で拭っているうちに、涙によつてぐちゃぐちゃになってしまった。なぜそんな風に涙でぬれたのかといううと、苦しんでいる浮世の人のことを想っていると涙が出て眠れない」という歌です。

これはやはり慈悲の人・慈愛の人良寛さんの真骨頂の歌と言えるとと思います。どうしても私たちは自分のことしか考えないとってはあれですけども、それが多いわけですけど、いったん大きな宇宙大の大きな我というものに気づいた良寛さんは、人のこと、利他行^{りたぎやう}と言いますけれども、人を利する、人を良くするためにいつも生きていた人と言っても過言でないのがこの歌です。

良寛さんは七十四歳の時、腹痛とか下痢が続きまして、それが半年ぐらい続いて亡くなります。亡くなる直前に貞心尼が駆け付けます。その時詠んだのが「いついつと 待ちにし人は 来たりけり いまはあひ見て 何か思はむ」であります。「いつ貞心尼は来るか来るかと思っていたら、今日来てくださった。もうお顔を見たらこの世に思い残すことはない」という歌です。亡くなる直前までこのようなみずみずしい感性に満ちた歌を詠まれた良寛さんは、本当に大きな心を持った人であつた

と思います。

川端康成は一九六八年ノーベル文学賞受賞講演で、ストックホルムでこの「いついつと 待ちにし人は 来たりけり いまはあひ見てのちは 何か思はむ」の歌を引用して、日本の自然の美しさと、そこに生きる人々の美しさを世界に紹介しています。世界の良寛になったわけです。

また、良寛さんが亡くなる直前に詠まれた辞世の句というのが、貞心尼は「裏を見せ 表を見せて 散るもみじ」であつたと言っています。これはやはり、人間とこの世とはかく、表を見せ 表を見せて 散るもみじ、が往々にしてあるわけですけども、純ということは、画策したり策略を練ったりうまく立ち回ったりでなく、表も裏もまるまるそのままに、そんな生き方を通してやってきたのが良寛さんなのではなかつたかと思えます。

良寛さんが生きられたのは今から二百年も前のことです。ですけども、現代に生きる我々にも、いろんな生きるヒントを与えてくれるような気がいたします。

今日は多くの人にご視聴いただき、本当にありがとうございます。私の今日のお話はこれで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

(こじま まさよし 全国良寛会会長)

(編集部謝辞) 本稿は令和三年度企画展「書でたどる良寛の書」(会期令和三年一〇月四日～十一月二〇日)の関連事業として行われた、第四〇回禅文化歴史博物館セミナー(令和三年〇月一三日、オンライン配信による実施)における御講演をもとに、講演者が加筆修正を加えたものを収録しました。小島先生には、企画展の準備段階から企画・監修をお引き受けいただき、多くの御指導・御助言を賜りました。献身的な御支援に対しまして、改めて深謝申し上げます。